岩手県気仙郡住田町

森で拾い集めた種を「イコウェルすみた」で育苗して、育った苗木を広葉樹の森に植え戻す育苗プログラム

住田町の「人」を好きになってもらう

何度も来たくなる場所づくり

「住田は人が人を呼ぶまち」と先述したが、同町の一般社団法人・邑（ゆう）サポート代表理事で、神奈川県出身の奈良朋彦さん（49）も住田で暮らす人々に魅了された1人だ。邑サポートは、東日本大震災の支援団体が、2011年に結成し、2014年に法人化。古里を離れて暮らす被災者や地域住民、支援団体をつなぐ活動を行っていた。町内の仮設住宅入居者が全員退去し、建物もすべて解体となった現在は、住民活動支援や地元イベントの企画・運営支援などに尽力している。

奈良さんは震災直後から現地で支援活動に関わり、住田町の仮設住宅建設後はコミュニティ形成を重点的に支援してきた。今は住田高校の魅力化、住民組織のサポートなど地域づくりにも携わっている。2020年、仕事のつながりで出会った町内在住の女性と結婚を機に、神奈川から住田に住所を移し、名実ともに町民となった。

「今、まちづくりを担っている50歳～60歳の人たちでは、いい意味で『子どものような大人』。日常を楽しんでいる人たちに、みんな引かれるんだと思う。だから、住田に観光に来てもらうというよりは、住田の『人』を好きになってもらうことが大事。僕たちがそうだったように、『何度も来たくなる場所』を、次の世代の人たちにつくってあげる立場になっているんじゃないかな」と話す奈良さん。

住田町の未来について思いを巡らせる奈良さん

邑サポートでは、町内の各地区で行われている住民組織による地域づくり活動のサポートや、地元の県立住田高校の魅力創出などに積極的に携わっている。

また、町内の森林で広葉樹を中心とした種を採取し、イコウェルすみたの敷地内に整備した育苗施設で管理し、その苗を再び森林へと植えることを目指す育苗プロジェクトを展開するなど、町民にとっても、町外の人にとっても魅力あふれるまちにしていこうと日々汗を流している。

住田に引かれ、移住した人々が、今度は人を呼ぶ立場になる。住田を愛した〝よそ者〟が地域に根付いて地元民となり、その人に魅了された人がまた住田に来る。そうしてこの町は、未来へとつながっていくのだろう。

風景に消えていきそうな気仙川に架かる水路橋。コンクリートと鉄だけで出来た美しい造形

静かに熱いまち

観光まちづくり学部　教授　南雲勝志

まちづくりワークショップで、住民の方に住田町はどんなまちか問いを出したことがあった。「住田町の資産といえば何でしょう？資産（シサン）だけに一人十二個あげてください」と。すると皆さん意外とすらすら答える。空気、森林、木材、種山、気仙川、水、固い岩盤、石灰岩などといった美しい自然を対象とする言葉が圧倒的に多い。あとは昭和橋、蔵などまちの特徴となる建造物や農業、野菜、漬物、鶏ハラミ等食材に関するもの。そこに必ず「人」というキーワードが入っていたことをよく覚えている。

気仙郡は元々住田町に大船渡市、陸前高田市と釜石市の一部を加えた区域であったが現在は住田町のみ。今も住田町には気仙大工だった方がおられ、屋台づくりなどではその技術に随分とお世話になった。先日もそのお一人が、茅葺き屋根の家で元気に暮らす姿を拝見できてとても嬉しかった。

古い町並みや歴史から受け継ぐ古風な人付き合いと、若者たちを中心にした新しい取り組みが良い意味で混在して、相乗的にお互いの良さを引き出し、まちを盛り上げている。人口五千人に満たないまちのコミュニティは、とても上手く働いている。情報共有の場は「まちや世田米駅」であったり、まちなかの食堂であったりさまざまだが、みんなが憩って語り合う場がある。そしてよそとの比較でない、「すみた」に住む良さを発信し続けている。それこそが住田流である。

さていよいよ今年から栗木鉄山跡保存活用計画が本格化し、昭和橋も架け替え中。それらがいずれ住田町の「懐かしい未来」を発信してゆく事を期待している。